

現代中国のインテリ層における 思想の分裂およびその政治的影響

蕭 功 秦

〈上海師範大学〉

20世紀80年代から今世紀初頭までの20年余りにおいて、中国のインテリたちは、二度の思想的分裂を経験した。一度目は80年代末の自由主義と新権威主義との間での論争であり、二度目が90年代末以来続く自由主義と新左派との間でのそれである。これら二度の思想的分裂の根本には、中国のインテリ層において形成された価値と思想的傾向がある。つまりそれは、中国はいかなる政治的選択と発展目標を採択すべきかという議論や、一連の国内外の諸問題をめぐる議論の中で形成された、自由派、新保守主義、そして新左派という三つの異なる価値と思想的傾向である。

本稿ではまず、改革開放以来、インテリ層に見られた、自由派と新権威主義派との論争を振り返り、さらに90年代以降の自由派と新左派との思想的分裂について分析する。また、新左派の主要な学問理論の根源や理論的根拠を分析し、さらに同派内部の穏健派と過激派を大まかに分類した上で、最後に中国のインテリ層における思想的分裂が、将来の中国政治に及ぼし得る影響について、若干の判断を下す。

改革開放以来の自由派と新権威主義の論争

80年代、改革開放と文革の災いに対する全社会の反省が進むに伴い、インテリたちは、率先して人間の尊厳、価値、自由、啓蒙そして思想の解放を訴えた。中国のインテリ層、思想界がまず提起したのは、価値態度、思维様式や政治的趣向に見られる、一種の同質性や共通の方向性、そして基盤的性質であった。80年代半ばを過ぎると、中国のインテリ層内部で、自由派と新権威主義の論争が始まった。その原因は、前世紀80年代の中国知識人に見られる自由啓蒙の思潮自体に、理論面で潜在している過激な傾向であった。80年代末には、価格メカニズム打破の挫折と経済領域での「官倒」現象の氾濫に伴い、自由主義思潮も日増しに過激になっていった。こうした状況下で、政治秩序の安定を強調する新権威主義が、自由主義の過激な思想に対抗する運動として出現した。自由主義と権威主義によるこの論争は、実際には20世紀初頭における自由民主派と開明専制派との論争の歴史的延長線上にあった。自由派は、個人の権利、民主化を強調し、一方の新権威主義者は、秩序と権威を強調した。しかし、中国の民主、自由に関する最終目標については、双方の間に根本的な相違は存在しない。

90年代における自由派の穏健化および新保守主義との融合

90年代半ば、ソ連および東欧において急激な民主化が挫折し、市場化への過程でインテ

リ層が相対的に益したこと、そして英米の政治哲学が徐々にインテリたちから重視されてきたことにより、中国における自由派インテリの主流は、穏健的になり始めた。インテリ層は、過激な自由理念に対して改めて反省したのである。自由派インテリの中でも中道派（つまり穏健的な自由派インテリ）と新保守主義（すなわち新権威主義）は、次第に合流し、民間の社会思想の基本的潮流となった。

中国の社会問題に対する三つの異なる態度

90年代以降、市場経済が中国に浸透するにつれて、高度経済成長と同時に社会に貧富が生じ、東西の地域間格差、権力と金銭の交換、腐敗や社会的不平等という問題が、次第に中国社会で顕著となってきた。こうした状況下で、インテリ層には三つの異なる思想的価値の流れが見られるようになった。それは、一つにインテリの中でも新右翼の観点であるが、改革中に見られる上述の各種否定的現象は、近代化の過程には生じるべき不可避免的代価である。経済発展さえすれば、移行過程に生じた各種社会問題は次第に解決される。つまり経済発展過程においては、政治的安定が何よりも重要である。こうした主張は、新権威主義者や自由派の右派に見られる。二つめは、自由派の中道派による認識であるが、民主化を進める政治改革により多元的社会による権力への監視は強化される。また腐敗と二極化は民主により抑制され、権力による地位の独占が改善されることが、根本的な解決である。

新左派の基本的立場

第三の観点としては、経済発展において見られるこれらすべての不平等に対する新左派の認識である。それは、資本主義は私有制を必然的に伴う現象であるというものである。彼らは、中国は現在、事実上「資本主義社会」にすでに突入したと認識しており、平等主義の様式に再度戻ることによって、「社会公正」問題は解決できると主張する。また彼らは、毛沢東が晩年に発動した文化大革命に価値を「改めて見出す」。新左派の思潮とは、西欧の左翼社会主義思想の理論を基礎として、平等と公平に核心的な価値を置くものである。また、中国が市場経済へと移行する過程において生じる、社会階層の分化、社会的規範の喪失や社会問題を、資本主義の社会的矛盾を体現するものと理解する。そして、中国の諸問題を解決する基本的選択として平等主義を認識している。

新左派における二つの類型

穏健型の新左派は、西欧の新左翼思想運動の理論とポストモダン主義の理論を援用することで、現に見られるような中国への批判に反論を試みる。西欧先進資本主義によって作り上げられた人間の分裂化、そして市場経済の過剰生産という否定的結果の視点から、彼らは西側モデルの社会とは異なる新たな提議を示した。このような新左派は、サイードの「オリエンタリズム」から重要な理論的資源をなお得ている。彼らは、西欧人が作り上げたオリエンタリズムという用語の範疇で不幸な生活に甘んじており、中国の主体性を根本的に喪失したと認識している。このことから新左派によれば、西欧の民主、自由、人権、近代化、市場経済、グローバル化、および知的財産権問題のすべてが、新植民地主義者に

よる文化面からの第三世界征服の概念的手段に帰結し得ると説明される。また、彼らは自身の「抵抗文言」の確立を主張し、西欧を目標とした学問を通じて、中国が市場経済化し、民主自由化と近代化という歴史的選択を拒絶する。

穏健派に比し、過激な新左翼はより強固な下層階級意識を有している。反智主義やナロードニキ主義的傾向、そして強烈な反ヨーロッパという感情や、道徳的な優越感の下での哲学論争、さらにジャコバン党に似た民衆動員への衝動が、見て取れる。新左派が上演した「切格瓦ラ」という新劇に対する注目の成果は、ナロードニキ主義の新左派として見なすことができる。つまり、過激な新左派が革命の号令の下、社会的に評価されたことを示した。その一貫した暴虐的な情念と価値の傾向は、将来、中国の実生活において徐々に影響力を増していくであろう。

インテリの思想をめぐる論争の三つの展望

一つめの展望は、民主化を条件とする思想の多元化である。上記三つの思潮すべてに、部分的ではあるが、政府の主導する価値観と符合するところがあるため、それらはすぐに合法的な存在空間を確保することができる。自由派、新保守主義および新左派は、それぞれが自由、秩序と平等な価値を主張するため、三者による相互補完と対峙という正常な条件下では、思想の多元化を求める中国の民主化にとってもそれらは有利に作用する。さらに、将来の中国の民主化にとっても貢献するものであろう。二つめは政治的展望であるが、過激な新左派と、近代化過程においては不利で絶望的な最下層が結び付くことで、反「邪悪な富裕層」運動を発動する。そして、中国にいる何人も剥奪されないという理想的な公平世界を、改めて設立しようと躍起になる。ただ、20世紀の歴史により、この種のユートピア的な試みは、一つの民族を重大な悲劇へと導くだけであると、すでに証明されている。しかし、目前の中国社会の発展状況から言えば、こうした状況が実現する可能性はやや少ない。三番目にあり得る展望は、ナロードニキ主義と権威主義の両極による揺さぶりである。権威主義の腐敗により重大な危機に陥り、中国は、全社会にわたり急激な民主化の波に吞まれるであろう。こうした状況下では、一種のナロードニキ主義的な民主主義と、権威主義的ワンマン政治が、交互に入れ替わる不安定な局面を迎えるかもしれない。このような際、新左派は、「劫富濟貧」（富者の財貨を奪って貧者を救済する）という平等主義を吹聴しつつ、権威的政治の腐敗に対する民衆の反逆精神に迎合し、ナロードニキ主義による高福利や高就業の平等主義という用語により、意識形成の上で優勢に立つ。これらは、社会、大衆の普遍的な要求であるからである。インテリ層の左傾化、政治エリートの低俗化、そして長期にわたり腐敗したエリート層による政治的抑圧を受けてきた多くの民衆の、平等主義への要求という三者が結び付き、ナロードニキ主義的な民主政治の潮流を形成した。ナロードニキ主義の「劫富濟貧」運動が一度始まると、他の中国人インテリたちも、再び保守的権威主義に傾き、ワンマンなエリート政治への回帰を主張するであろう。このように、ナロードニキ主義による大衆政治と権威主義的なエリート政治の間には、振り子の揺れのような二つの衝突モデルが形成される。中国はラテンアメリカが陥った政治の落

とし穴に落ちかけている。中国は矛盾に満ちているものの、経済発展は基本的に良い情況にあり、近代化の破綻（Breakdown of Modernization）の可能性も決して高くない。後者2つが起こる可能性も低く、この分析は理論的な警告の意義を主として有している。

（原文は中国語。邦訳 加治宏基）